HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農業・農村の変容と集落存続の取組み ： 置戸町における3集落の比較から
Author(s)	正木, 卓
Citation	フロンティア農業経済研究, 23(2), 42-50
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83082
Type	journal article
File Information	23(2)_05_MASAKI.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〔フロンティア農業経済研究　第23巻第２号　2021.３〕

［論文］

農業・農村の変容と集落存続の取組み
－置戸町における３集落の比較から－

弘前大学農学生命科学部　正　木　　卓*

The Transformation of Agriculture and Agricultural Villages and Some Effort for Keeping Villages Alive : From Comparisons of Three Villages in Oketo-cho

Suguru MASAKI*
Faculty of Agriculture and Life Science, Hirosaki University

Summary

In this thesis, applying MTS structural theory concerning the regional patterns of agricultural structure in the Tokoro valley to three agricultural villages, I arrange the differences defined in the generality and agricultural structure of the villages, which reflect their efforts to continue to exist and their activities at the village level, based on their historical development and recent transformation.

Ⅰ　はじめに

本論では、農業・農村構造の変化と農家の急速な減少のもとで、農村集落を存続させる取り組みについて考察を行う。北海道においては、住民意識の問題や市町村における組織体制、財政的な制約等により、農村集落を維持させる対応は必ずしも十分な状況とはいえず、すでに問題が深刻化しているところも多い。一方で、集落の農業構造や生活組織は異なるものの、町全体の住民運動を反映した住民の主体的な活動による集落維持の取組みがみられる。事例として取り上げるのは、常呂川の最上流部に位置し、流域内で大きな地域差がみられる置戸町である。分析においては、常呂川流域における農業展開の地域類型の試論であるMTS構造論[注1)]を援用して、３つの対象地域を選定し、各集落の歴史的展開と近年の農業・農村の変容を踏まえ、農村集落の存続の取組みとこれまでの町レベルでの活発な集落活動を反映した一般性と農業構造に規定された相違点を整理することとする。

注１）坂下[11]は、網走地域の入植時期と開発の過程を整理し、訓子府町を事例として、町村内部でも地帯内部の地形やそれに規定された開発過程の特徴から農業構造に地域性と多様性を有していることを示し、網走農業のMTS構造と称している。

Ⅱ　MTS構造と農業構造変動

１．置戸町農業のMTS構造

置戸町は常呂川流域の最上流部に位置する。常呂川流域農業はその地形条件により入植時期が異

* Corresponding author : masaki@hirosaki-u.ac.jp

なり、流域の優等地である川沿いの平坦部が最も入植が早く（稲作）、次いで高台地帯の開発が行われ（畑作）、残された劣等地に戦後開拓入植が行われ、酪農主体の経営になるという図式である。入植時期の元号をとってMTS（明治・大正・昭和）構造と言われている。

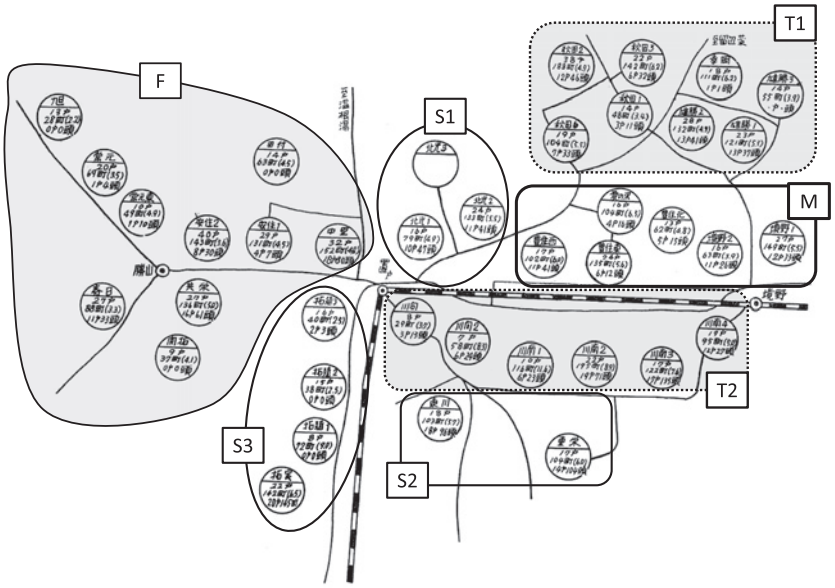


図１　置戸町農業の地域構造

注）『置戸町農協（農業）史』2002年の「地域別史」により作成。

これを模して、置戸町の農業開発の序列を模式図化したのが図１である。これは、1962年刊行の『農協史』所載の農事組合の現況図と2002年の『置戸町農協（農業）史』の集落史の記述（pp.18〜32）をもとに、地域区分を行ったものである。

MTS構造論を援用したが、Mの川沿いは畑作地帯であり、中下流部が稲作地帯を構成するのとは異なる。1901年に川下にあたる訓子府町から連なるクンネップ原野での殖民地選定事業から農地開発が開始される。ＴはＴ１とＴ２からなるが、ここは常呂川右岸の高台（Ｔ１）と訓子府川沿いを含む高台地域（Ｔ２）に位置しており、大正期になってからの入植が中心であり、丘陵作物である薄荷や亜麻などの工芸作物中心の畑作地帯を構成した。Ｓは戦後開拓地帯が分布しており、開拓パイロット事業による草地開発を基盤に酪農専業として展開した地域である。拓殖実習場卒業生が集団入植し、共同経営を行った拓実集落が有名であった。置戸町の場合、一定の期間まで冬期の林業兼業への依存が高かったが、特に1960年以降も林業兼業が継続した最上流部の中山間地域をＦと表記した。

置戸町は、ＭとＴ２の大部分からなる境野地区、Ｔ１の秋田地区、Ｔ２の西側の一部とＳ１・Ｓ２・Ｓ３からなる置戸地区（置戸市街を含む）、置戸川最上流部Ｆの勝山地区から構成されている。調査対象地としては、戦後開拓のＳ地区が離農の多発により地域としての維持が困難になっているため、Ｍから豊住集落（図では４農事組合）、Ｔ１の秋田集落（図では８農事組合）、Ｆの勝山集落（図では中里を除く９農事組合）を選定した。

以下ではＭを川沿、Ｔを高台、Ｓを丘陵山間、Ｆを山村として分析を進めていく。

２．集落からみる農業構造変動

表１は集落ごとの農家戸数と経営耕地面積の動向を示したものである。1960年と1990年の農家戸数の変化を見ると、1960年を100とした指数で15〜53と集落により幅があるが、町全体の指数は28であり、大きな減少を示している。雄勝、秋田、中里、拓実、安住、勝山、常元は指数で30以下と大幅に減少している一方、幸岡、豊住、川南は50

表１　集落別経営規模拡大の動向

単位：指数、ha、％

	1960年を100とする指数			一戸当たり収穫面積	同左1960年を100とする指数
	農家戸数	経営耕地面積			
	90年	80年	90年	60年	90年
T　雄勝	29	110	148	4.1	509
T　幸岡	53	86	130	6.0	246
T　秋田	15	64	76	4.5	515
MT　境野	38	95	101	3.5	266
M　豊住	51	98	106	5.1	207
MT　川南	47	88	107	6.3	226
MTS　北光	36	110	151	4.9	415
MF　中里	24	159	176	4.2	725
S　拓実	21	129	137	3.9	656
F　安住	24	91	97	3.7	412
F　勝山	29	144	148	3.9	519
F　常元	26	90	112	2.7	432

資料：集落カード（1970、2000）より作成

前後で営農が継続されている。類型別では、川沿流域の離農は比較的少ないが、丘陵山間や山村は戸数の減少が著しいことがわかる。

また経営耕地面積についてみると、1980年時点で12集落のうち７集落で1960年に対し耕地が減少しているが、1980年から1990年に耕地の拡大がみられ、1960年より耕地が減少しているのは秋田と安住の２集落だけである。1980年までで減少が著しいのは秋田であり、増加が著しいのは中里、拓実、勝山である。耕地の増減の要因として1963年から開始された農業構造改善事業の実施の有無がある。1970年集落カードによれば実施した集落は雄勝、川南、北光、中里、拓実、勝山であり、川南を除き構造改善事業の実施が耕地拡大に繋がっている。1980年から1990年には全ての集落で拡大傾向にあるが、雄勝、幸岡、北光の増加が特に著しい。

以上を類型別に見ると、川沿流域は農家戸数の減少は小さく、耕地面積も変動の幅が小さい。高台地域は構造改善事業実施の有無により展開が異なる。構造改善を実施した雄勝は耕地拡大が進み、特に1990年までの拡大が著しい。一方、実施されなかった秋田は農家戸数の減少、耕地の減少がともに町内で最も大きい。丘陵山間は開拓パイロット事業による草地造成により飼料作物の面積が大きく増加しており、1980年時点で耕地が拡大している。構造改善事業の実施による耕地拡大が見て取れる。

表２は1970年時点の販売金額規模別農家の比率を示している。1960年からの農業近代化政策により農業構造は変化するため表１とは連続せず、変化の中での数値としてとらえる必要がある。志賀[12]により1970年時点において農業により自立できる最低の販売金額を150万円と考え、その前後の構成比をみていく。17集落のうち、９集落において販売額150万円以下の戸数が過半となっており、特に高台と山村に集中している。川沿はいずれも75～85％が150万円以上となっている。これは、経営耕地面積は小さいが面積当たりの収益性が高いためと考えられる。なお、丘陵山間は集落によって異なり、北光・拓殖は150万円以下が70％を超え、拓実・東栄は150万円以上が80％を超えている。また東川は150万円以下と以上が半々となっている。

表２　販売金額規模別農家の比率（1970年）

単位：戸、％

	農家戸数	販売なし	～50	50～70	70～100	100～150	150～200	200～300	300～500	500万円以上
T　雄勝	38	-	5.3	2.6	10.5	42.1	21.1	15.8	2.6	-
T　幸岡	13	-	-	-	38.5	61.5	-	-	-	-
T　秋田	45	2.2	6.7	6.7	8.9	26.7	31.1	15.6	2.2	-
MT　境野	34	2.9	8.8	-	-	2.9	41.2	29.4	14.7	-
M　豊住	60	-	3.3	3.3	5.0	13.3	28.3	36.7	10.0	-
MT　川南	48	-	2.1	2.1	-	8.3	27.1	39.6	20.8	-
T　川向	9	-	11.1	-	-	11.1	11.1	33.3	33.3	-
S　東川	8	-	25.0	-	25.0	-	12.5	-	37.5	-
MTS　北光	30	-	33.3	10.0	6.7	20.0	16.7	6.7	6.7	-
MF　中里	22	13.6	9.1	-	9.1	4.5	31.8	22.7	9.1	-
T　拓殖	18	-	44.4	-	16.7	16.7	11.1	11.1	-	-
S　拓実	18	-	-	-	-	5.6	11.1	55.6	27.8	-
F　安住	51	2.0	33.3	15.7	15.7	15.7	2.0	15.7	-	-
F　勝山	29	6.9	10.3	10.3	13.8	24.1	20.7	13.8	-	-
F　常元	26	-	38.5	15.4	34.6	7.7	3.8	-	-	-
F　春日	14	7.1	28.6	-	21.4	21.4	14.3	7.1	-	-
S　東栄	12	8.3	8.3	-	-	-	16.7	41.7	25.0	-

資料：集落カード（1970）より作成

表３　農家就業の状況

単位：％

		兼業農家率	男				女			
			自家農業だけ従事	自家が主	その他が主	その他だけ従事	自家農業だけ従事	自家が主	その他が主	その他だけ従事
1990										
T	雄勝	9.5	94.4	5.6	-	-	100.0	-	-	-
T	幸岡	66.7	66.7	26.7	-	6.7	80.0	-	-	20.0
T	秋田	46.7	77.3	13.6	9.1	-	89.5	-	-	10.5
MT	境野	41.7	70.6	17.6	2.9	8.8	91.7	-	2.8	5.6
M	豊住	80.0	36.1	44.3	16.4	3.3	80.4	7.1	1.8	10.7
MT	川南	40.0	69.2	21.2	9.6	-	84,5	3.4	5.2	6.9
MTS	北光	56.3	57.1	21.4	21.4	-	80.0	16.0	4.0	-
MF	中里	0.0	100.0	-	-	-	100.0	-	-	-
S	拓実	26.7	88.0	4.0	8.0	-	95.5	4.5	-	-
F	安住	42.9	70.0	13.3	10.0	6.7	87.1	-	9.7	3.2
F	勝山	58.3	59.1	36.4	-	4.5	89.5	-	-	10.5
F	常元	53.8	62.5	31.3	6.3	-	88.2	-	11.8	-
1960										
T	雄勝	52.8	69.9	26.8	0.8	2.4	100.0	-	-	-
T	幸岡	0.0	100.0	-	-	-	100.0	-	-	-
T	秋田	41.2	78.3	12.2	3.9	5.6	95.5	1.1	-	3.4
MT	境野	57.1	56.4	12.9	14.9	15.8	88.9	1.0	2.0	8.1
M	豊住	21.1	85.4	4.1	2.4	8.1	97.7	-	-	2.3
MT	川南	18.9	91.0	2.8	0.7	5.6	97.8	-	-	2.2
MTS	北光	34.1	77.5	16.9	1.4	4.2	100.0	-	-	-
MF	中里	93.9	34.5	58.2	3.6	3.6	96.4	-	-	3.6
S	拓実	77.8	38.3	28.7	7.0	26.1	88.5	-	1.0	10.6
F	安住	67.4	62.6	15.5	9.0	12.9	93.5	0.6	3.9	1.9
F	勝山	90.5	41.2	23.5	23.5	11.8	91.5	1.4	-	7.0
F	常元	78.0	33.3	28.0	25.3	13.3	97.6	-	1.2	1.2

資料：集落カード（1970、2000）より作成

農業者の就業状況について1960年と1990年を比較した表３を見ると、その動向も集落により異なる。兼業率に着目すると、1960年には川沿は兼業率は低いが、境野は町平均の53.9％より高い57％である。高台は町平均に近いが、幸岡では専業率100％である。丘陵山間は拓実で高く、北光はやや低い。山村はいずれも高い兼業率を示している。

1990年になると、町平均兼業率は46.7％とやや低下する。河川流域では豊住で兼業率が80％まで急激に上昇し、川南は平均程度に上昇、境野はやや減少している。高台では雄勝が専業に、幸岡が兼業に大きく転換し、秋田は変化が少ない。丘陵山間は拓実が専業化し、北光はやや兼業に傾いている。山村は兼業率がやや低下し、40～50％台となっている。このように、兼業率は集落ごとに異なっており、地域別の傾向を指摘することは難しい。就業状況を見ても、1960年では山村地帯では「その他に従事」の比率が相対的に高く、農外労働に依存した構造が見て取れる。その他集落では、境野が同様に農外労働の比率が高い。1990年になると豊住、北光、安住で男子の15～20％程度は農外労働が主となっており、それ以外は10％以下となっている。

つぎに土地利用の変化をみてみよう。1960年時点ではいずれの集落も麦・豆・工芸作物の畑作に飼料作物を加えた作付構成であり、丘陵山間は酪農の比重を高めつつあった。1990年になると川沿は小規模ながら集約的な野菜作、高台は飼料作物の比重をやや高めた大規模畑作、丘陵山間は酪農に特化した大規模化、山村は相対的に小規模な畑作と酪農の混在地帯へと展開した。川沿は1960年から1990年にかけての農家戸数の減少は小さく、耕地面積も変動が少なかった。その他地域は農業構造改善事業実施の有無によって展開が異なる。実施した集落は耕地拡大が進むが実施しなかった集落は耕地の減少が進む。高台は農家数の残存率も構造改善事業実施の有無に比例し、実施しなかった集落は減少率が最も高かった。丘陵山間は構造改善事業の一環として行われた開拓パイロット事業による草地造成や貸付牛制度により、酪農専業化が進んだ。山村はいずれの集落も農家戸数の減少が著しい。

一方で、農家就業条件は山村以外の類型では分類ができなかった。山村は1960年に高い兼業率が見られ、1990年になってもやや高い兼業率であった。

Ⅲ　３集落の歴史的展開と集落変容

戦前における置戸の入植形態は主に３つからなっている（置戸町[4]）。第１に、明治期の北見屯田縁故者や北光社（1897年設立の北見の開拓会社）

の関係者による入植、第２に本州府県からの団体入植、第３に小作農場制による小作人の入植である。入植は概して常呂川の町内下流部から始まっており、1903年以降の豊住、川南、境野での北見屯田や北光社の縁故者の入植が第一の形態である。その後1906年に中里に入った広島団体、1909年に安住に入った佐坂農場への団体入植などが続いた。

また第二次世界大戦後には戦後緊急開拓事業が実施されたが、置戸町においても157戸が入植した（置戸町[3]）。戦後開拓は未墾地や条件劣等地が割り当てられることが多く、事業開始から数年以内に離農する者が多発した。置戸町でも1974年時点で既に118戸が離農し、定着率は25％程度に留まった。一方で拓殖山（現拓実）、常盤（現東栄・東川）等では開拓パイロット事業が導入され、規模拡大と酪農専業化への道を歩むようになる（置戸町拓実[6]）。

以上を踏まえ、これから３集落の展開過程を概観していく。

１．豊住集落

豊住集落は境野、川南とともに境野（自治）連合会に含まれるが、独自の部落会館を運営している（豊住[13]、豊住[14]）。境野地区は置戸町の東端、常呂川の下流に位置し、旧池北線では訓子府境に境野駅があった。境野自体は２集落からなり、その上流側に常呂川を挟んで北側の平坦部が豊住、南側の高台が川南である。

豊住集落は現在、農協組織としては「豊住営農集団」の名称となっている。この集団はトラクター利用組合を前身としている。1929年に東、西、北、愛の沢の４つの農事実行組合が設立され、1941年には起統東部、西部の２組合が分立して６組合となり、1947年には元の東、西、北、愛の沢の４農事実行組合・部落となったが、さらに東から日興（市街地）が、西・愛の沢から起統が分立して６部落体制となっている。

農協による1979年の農事組合再編により、豊住１営農集団（東部21戸、日興・北部６戸）・自治会（27戸）と豊住２営農集団（西部16戸、愛の沢４戸、秋田６線４戸）・自治会（24戸）に移行し、2004年には両者が合併し、ひとつの豊住営農集団となっている。なお、豊住地区協議会は、旧公民館の建設を契機に1956年に発足しており、豊住神社の運営に関しては別途祭典委員会を組織している。

農業については、1959年時点では農家が93戸（600人）で、作付面積は397ha、主要作物は麦類、大小豆、菜豆、ビート、馬鈴しょであった。有畜化の動きもあり、牛が80頭、綿羊が80頭、鶏が2,000羽であった。３年後の1962年には農家戸数の減少が始まって70戸となり、面積がやや増加して403ha、乳牛飼養戸数は26戸（37％）、84頭（１戸当たり3.2頭）であった。1968年に10戸がトラクターを導入している（農業構造改善事業）。この時に豊住東部機械利用組合が設立された（1989年まで約20年間）。

ビートは北見への芝浦製糖の進出で増加を見せ、1966年の甜菜生産改善推進地区の指定により、ペーパーポット育苗施設や移植機の補助を受けた。馬鈴しょも置戸が種イモの主産地に成長し、この集落でも種イモが主力を形成した。1961年からは玉ねぎが先進農家で導入され、1964年には９haとなり、1977年には露地野菜モデル団地指定を受け、玉ねぎの生産振興が図られている。玉ねぎは1992年から玉葱生産体制改善モデル事業により、移植機、播種機、ハーベスタ、作業機が導入され、機械化一貫体制が図られている。1977年には農協の小麦乾燥調製施設と自脱型コンバイン４台が導入されて、小麦の作付けが増加を見せている。また、1987年に策定された農協の農業振興計画に対応して、メロンの栽培研究・出荷が行われ、さらに当時ではめずらしい高級野菜ヤーコンの栽培を手掛けるなど、労働集約的な方向を模索している。

表 4 は豊住の作付け変化を示している。1958年には畑作や亜麻・薄荷などの特用作物、飼料作物などの多様な作付が行われていたが、豆類や飼料作物、特用作物が減少、畑作と玉葱に単純化していく（1988年）。このように経営面積の少ない豊住では玉葱や種子馬鈴薯、高級菜豆など、主に高収益作物への転換がなされていたが、労働力の限界により玉葱の作付け拡大には限界があった。しかし、1990年代になると、除草剤の普及や収穫機械体系が整備され、高能率の作業機が導入されることで、飛躍的に面積の拡大がなされた。現在は、種子馬鈴薯は栽培されず、玉葱を主として小麦、馬鈴しょ、ビートの輪作が行われている。

農家戸数は減少しつつも、玉葱を中心とした露地野菜の拡大によって、農家経済が安定化し、それに伴い後継者の確保もスムーズに進み、個別完結的な農業経営を基本としている。ただし、集落としての結束が強いという特徴がみられる。

表 4　豊住集落の作付変化

単位：ha

	1958	1970	1988	1993	1998	2003	2008
水稲	8.3	5.4					
小麦	21.3	14.1	73.5		50.0	53.1	61.5
ビート	93.3	75.5	82.7	88.5	82.1	85.1	79.2
豆類計	48.0		15.5	17.7	10.7	8.4	3.4
（高級菜豆）	14.5	69.6	-	17.4	10.7	8.4	3.3
（その他）	33.6		-	0.3			0.1
馬鈴薯計	29.3	49.5	88.0	84.7	61.8	59.6	42.7
（食用）	-	-	-	71.4	47.9	45.9	42.7
（種子）	-	-	-	13.2	13.8	13.7	
スイートコーン	8.1	2.7	3.3	5.0		15.8	
玉ねぎ		7.7	74.9	93.3	97.9	98.7	116.7
野菜類	4.3	10.8		0.6		0.6	1.0
薄荷	12.4						
亜麻	7.9						
その他麦	74.7						
雑穀など	4.4						
その他	1.9						
飼料作物	83.7	88.7					
合計	397.5	323.9	337.9	289.8	302.5	321.2	304.4

注 1）『豊住100年史』pp.92-93より作成
　2）飼料作物はクローバーが主体

2．秋田集落

1911年から 2 ヵ年にわたり秋田県から139戸の団体入植が行われたのがこの集落の起源である（秋田地区[1]）。商品作物として薄荷が栽培され、最盛期の1916年頃には耕作面積の 2 割を占めた。その後、戦時期には食糧不足により馬鈴しょ等の主食用作物に転換された。一方、米産地である秋田県から入植したことで水稲の試作が行われ、 2 年後の1914年には初収穫があり、1924年には本格的な造田が始まり、最盛期には150町歩を超える水稲作の拡大がみられた。しかし、1931年の冷害をきっかけに畑への転換が進み、1943年には 6 割まで減少した。製糖工場の設立により、秋田でも甜菜の作付けが増加し、1938年頃がピークとなった。繊維原料として亜麻も重要視され、第二次大戦末期までは盛んに作付された。その他に、1910年代にはエンドウ・菜豆等の豆類や除虫菊、薬草類が多く作られた。戦前の畜産は自家用の域を脱しなかったものの、1935年以降は畜牛30頭余を数えた。戦時中には飼料不足により途絶えるが、戦後の酪農振興と共に再び乳牛の飼育が盛んになった。

表 5 は、1979年からの秋田地区の作付け変化を示したものである。1979年には酪農が増加し、土地利用でも飼料作物の割合が694haのうち 3 分の 2 となる466haとなっている。一方、畑作は228haであるが、そのうち菜豆が94haで最も多く、続いて小麦、馬鈴しょ、ビートが続き、スイートコーンが導入されているのも特徴である。2009年には総面積が200ha以上増加して930haとなるが、依然として飼料作物が 3 分の 2 を占め、畑作については菜豆が減少して、小麦、食用馬鈴しょ、ビートの 3 作物の構成となっている。

秋田集落では、1945年には秋田部落連合会が設立され、戦後復興が急速に進展した。1974年には、秋田地区住民協議会を設立し、自主的な住民活動を展開する。1990年より「地遊人」制度が開始さ

れ、結婚定着者とオケクラフト製作者の移住が進んでいる[注2)]。住民協議会設立による住民主体の地域づくりや「地遊人」[注3)]という名称で1996年より外部からの人材受け入れを実施する等、地域活性化の取組みの先進的集落となっている。

表５　秋田集落の作付変化

単位：ha

	1979	2009	(比率)
水稲	0.8		
小麦	46.2	119.5	34.0
燕麦	1.9		
菜豆	94.5	22.0	6.3
馬鈴薯	30.4	87.2	24.8
(種子)	15.0		
(生食)	15.4	80.1	22.8
(加工)		7.2	2.0
ビート	29.6	85.7	24.4
スイートコーン	22.0	12.4	3.5
野菜		0.7	0.2
その他	2.9	23.6	6.7
畑小計	228.1	351.1	(37.8)
飼料作物	466.0	578.6	(62.2)
(採草)	351.1	412.4	
(デントコーン)	113.7	166.2	
合計	694.1	929.6	(100.0)

資料：『秋田100年史』より作成

３．勝山集落

勝山に関する資料は少ないが、置戸町史などから可能な限り集落の変遷を捉えてみたい（置戸町[5]）。

勝山は共栄１、２と市街地に分かれ、共栄１には1911年よりいくつかの団体入植があったが、傾斜地が殆どで豪雨の度に表土が流され、いずれも離農した。市街に隣接する共栄２は比較的平地が続き、1911年より個人の入植が続いた。森林資源が豊富なため林業が盛んであり、1916年の木材景気も手伝って人口が増加し（1916年40戸180人、1919年125戸450人）、造材関係者で勝山市街は大いににぎわった。第一次大戦後の不景気、大規模盗伐の発覚、官行斫伐事業の開始により木材景気は吹き飛び、勝山市街も戸口が半減した。不況は長く続いたが、1941年の太平洋戦争による軍需材の受注増加により再び林業が復興することとなる。

しかし、1975年頃には輸入材の増加や労働者の高齢化などで、林業が衰退し人口減少がさらに進展し、市街地の様子も一変する。数多くあった飲食店などの生活インフラも撤退を余儀なくされた。なお、1962年からの第１次農業構造改善事業と林業の衰退は時期的に並行しており、離農がさらに進展した。こうした集落衰退は、1978年の農協支所廃止等につながっていく。

一方で、集落への養豚企業誘致計画を契機とした集落の将来を話し合う住民協議会（「勝山を考える会」）の設立も行われている。この住民協議会を母体として、1989年から2007年まで山村留学に取組み、1996年から2016年までは「愛タウン事業」による実習生の受入れも行われた。さらに地域農業の維持から、2015年に勝山地区の農家13戸による農事組合法人「勝山グリーンファーム」が設立され、経営耕地面積約470haと道内最大の畑作法人経営となっている（東山・正木[15]）。地区を巻き込むことで農地保全や農業生産のみならず、コミュニティの維持にも寄与している。

注２）矢崎[17]は、置戸町における社会教育活動の中からオケクラフトが生まれ、多くの町民の支持を得ながら新しい地場産業として根をおろしていることを整理している。

注３）「地遊人」とは、都会の若者を呼び込み新しい風を地域に吹かせ活性化を図ろうという事業で、1996年から町内４地区（秋田、豊住・北光、川南、勝山）に受入組織を設立（愛タウンふるさとづくり協議会編[2]）。現在では秋田地区にオケクラフト事業で４工房、地遊人事業で９名の定住が行われている。

4．小　括

置戸町の入植は４つの形態と時期にわかれ、境野地区は明治期の北見屯田の入植、秋田地区は府県からの団体入植、置戸地区は戦後開拓が開発の端緒であった。境野地区は域内では比較的肥沃な土地であることに加え、農業に対する研究心も強かったため、置戸を代表する穀倉地帯となった。1960年頃までは麦類や薄荷・亜麻などの工芸作物と酪農がメインであったが、1960年代に急速に玉葱作が拡大し、基幹的作物となった。秋田地区は戦前は積極的な造田を進め、一時は150haを超えることもあった。戦後は薄荷や白花豆など、畑作物と酪農の混合地域として発展した。置戸地区は戦後開拓入植が主で、入植当初は畑作や野菜との混合経営も行っていたが、開拓パイロット事業により草地造成を行い、酪農単一経営への転換を果たした。

勝山地区は入植の時期は秋田地区と同様に1910年代に団体入植があったが、展開過程が異なる。山間部の勝山地区は林業が盛んであり、森林鉄道も通る等林業と共に発展してきた。農業も林業兼業に依存した展開となっており、小規模性と兼業率の高さが特徴的であった。1960年以降、林業の衰退と共に急速に離農が拡大し、構造改善事業により酪農を導入し規模拡大を図ってきた。

Ⅴ　おわりに

常呂川流域中流部以下の農業の展開は、自然立地条件と入植の過程から展開に差異が生まれ、地域性や多様性が生じるとされてきた。これに対し、最上流部の置戸町では林業という異なる産業によって農業の展開が規定されており、農業展開過程の決定要因が中流部とはやや異なっていた。このことから、これまでMTS構造として理解されてきた網走農業に、新たに最上流部の山村Ｆ（Forestの頭文字）を付け加えることで、F-MTS構造と称することとする。

結論として各集落での農業の位置づけを示すと以下のとおりである。

もっとも肥沃で平坦な土地に入植したＭ（川沿）では、立地条件の良さを活用して価格抑制政策の下で、経営の集約化によって農家戸数の減少を抑えている。それに次ぐＴ（高台）でも畑作と酪農に分化しながら地域の持続性を維持してきた。しかし、Ｓ（丘陵山間）や、Ｆ（山村）では耕境後退のため崩壊の危機に立たせられているが、酪農は乳価の価格支持が高水準に維持されていたため、かろうじて存続している。

経営危機がシビアなＳ（丘陵山間）やＦ（山村）では、法人経営でその危機を短期的に乗り切ろうとしている。すでに述べた農事組合法人「勝山グリーンファーム」の動きである。またＴ（高台）の秋田地区では「地遊人」という事業で、1995年より外部から人材の受け入れを実施し、10名程度の定住化という成果を収めた。Ｓ（丘陵山間）の拓実集落は2020年に農家戸数が１戸まで減少する見込みで、2019年に500haを越える規模の農事組合法人「拓実Fresh農園」が設立されている。

農政の価格抑制政策という市場からの撤退要求を跳ね返すにはあまりに非力であり、山間地や中山間地の農業を抜本的に保護する農政がまたれる。それまでのつなぎとしての最劣等地における協業法人組織化の形成を、地域農業主体の農協や地方自治体の誘導策で乗り切らなければならない。

参考文献

[1] 秋田地区開基七十周年記念行事記念誌編集委員会編『秋田史　昭和五十五年　置戸町秋田地区開基七十周年記念誌』秋田地区開基七十周年記念行事記念誌編集委員会、1980.

[2] 愛タウンふるさとづくり協議会編『地遊人制度25周年・愛タウンふるさとづくり協議会設立20周年記念式典』愛タウンふるさとづくり

協議会、2016.
[3] 置戸町編『戦後開拓史』置戸町、1974.
[4] 置戸町史編纂委員会編『置戸町史　上巻：戦前編』置戸町、1985.
[5] 置戸町史編纂委員会編『置戸町史　下巻：戦後編』置戸町、1987.
[6] 置戸町拓実編『拓実史　創造』置戸町拓実、1987.
[7] 置戸町農業協同組合編『おけと農協史』置戸町農業協同組合、1989.
[8] 置戸町農業協同組合編『置戸町農協（農業）史』置戸町農業協同組合、2002.
[9] 金子剛「網走農業の地域分類」『北海道農業』17、1994、pp.91-105.
[10] 坂下明彦『中農層形成の論理と形態－北海道産業組合の形成基盤－』御茶の水書房、1992.
[11] 坂下明彦「地帯構成とその形成要因」岩崎徹・牛山敬二編著『北海道農業の地帯構成と構造変動』北海道大学出版会、2006、pp.54-62.
[12] 志賀永一「網走地域の農業構造に関する一考察：端野町を事例として」『北海道大学農経論叢』50、1994、pp.189-203.
[13] 豊住史編纂委員会編『豊住五十周年史』豊住史編纂委員会、1958.
[14] 豊住100周年実行委員会編『一〇〇年史　豊住の絆』豊住100周年実行委員会、2009.
[15] 東山寛・正木卓「農地の中間保有の意義と担い手問題：北海道を事例に」『土地と農業』46、2016、pp.39-49.
[16] 北海道農業ベクトル研究会編『新北海道農業発達史』北海道地域農業研究所、2013.
[17] 矢崎秀人「山と木を見直す過疎のまちの生産教育」『地域生涯学習の計画化 上　地域づくりと自己教育活動』筑波書房、1992、pp.281-293.
[18] 矢崎秀人「1950年代における置戸町の社会教育：置戸町の初期公民館」『社会教育研究』27、2009、pp.47-54.
[19] 矢崎秀人「1960年代における置戸町の社会教育：農業構造改善事業と社会教育」『社会教育研究』19、2000、pp.97-107.
[20] 矢崎秀人「1970年代における置戸町の社会教育：急激に変化する時代に対応した新しい社会教育の推進体制を求めて」『社会教育研究』18、1999、pp.103-118.

（2020年 8 月 4 日受理）